女体強制し
DOminated Soldier 編
SlaveFighter MOON
GLAMOUR WORKS
ADULT ONLY

セーラームーンこと月野うさぎは、
先史時代の超文明シルバーミレニアムから転生した
太陽系帝国の正統後継者たる王女セレニティである
現代に甦った超科学と呪術の融合による超常の力を揮う「セーラー戦士」
として闇に潜む異形のモノどもを相手に月の支配者は戦い続けるのだ

「はぁッん！アッあぁん！ま、まもちゃん！も、もっとぉ！」
男にまたがったうさぎが激しく腰を上下させ嬌声をあげる
まだ熟れきってない肉蕾は完全に開ききり、男…地場衛の
肉棒を貪り尽くすように包み込み相手の精を吸い尽くす
ここは十番町の地場衛の自宅マンション寝室
すでに一昼夜…ふたりはひたすらセックスに耽っていた
「……予想はしていたけど完全におさる状態ね、うさぎちゃん」
「ま、まあ前世以来の恋人の逢瀬なんだし仕方ないよ」
呆れたように呟くルナをアルテミスがなだめる
「まさか一般人からエナジーを集めるわけにいかないだろ？」
「そうだけどさ……」
「四人が消息を絶ってからもう大分経つ…このプランを提案した
のはルナじゃないか」
「ええ、わかってるわ……」

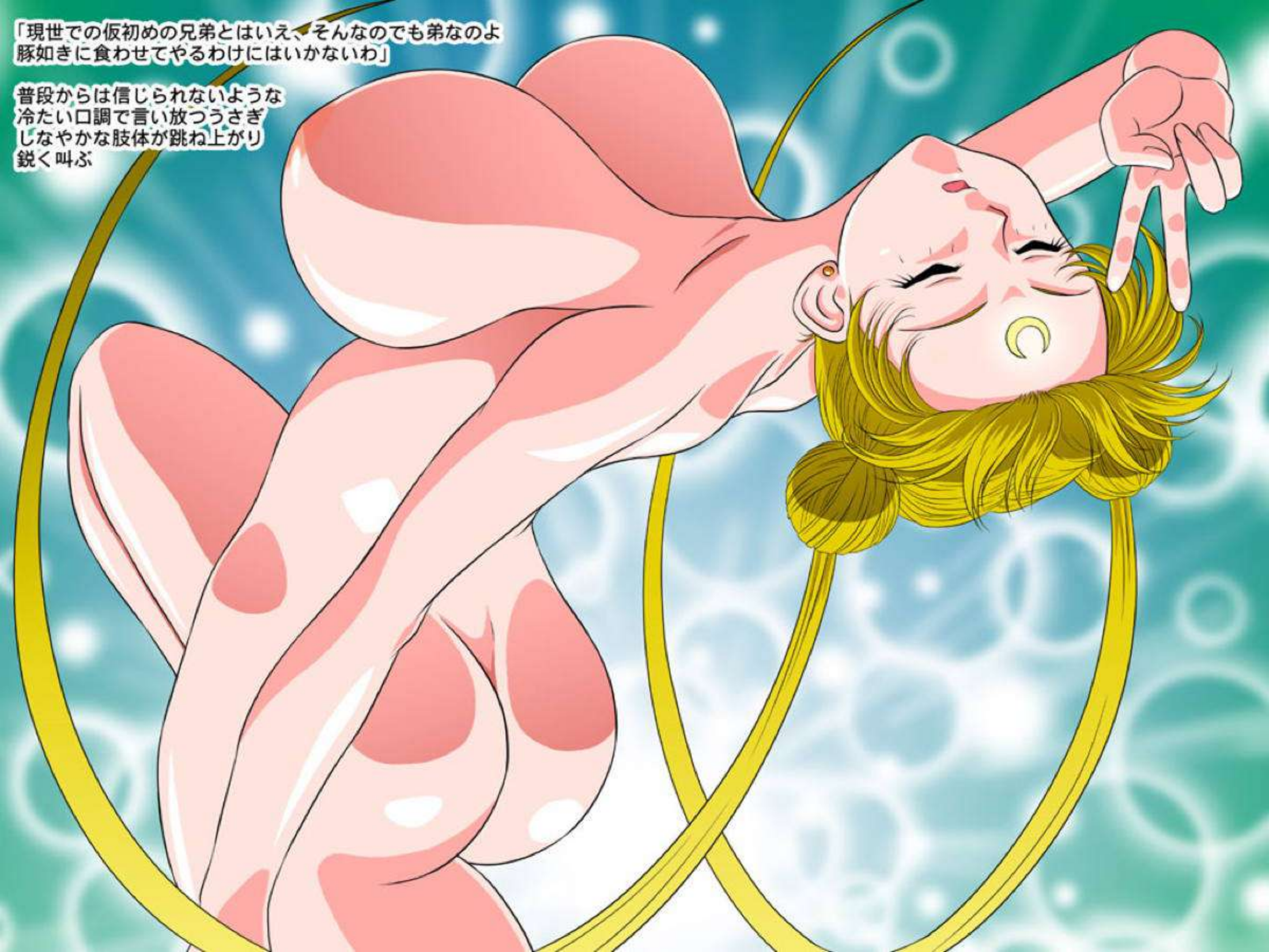
「……あ、アレ？…にゃ、にゃんかしゅごいのキタ――ッ！」
ろれつの回らぬ口調でもう何度目かもわからぬ絶頂に尻を
震わせながら、うさぎは一際大きく叫び始めた
「アッ！！アァッ！！！！ア――ッ！！！！な、なにこれェッ？！！」
うさぎの胸元に水晶の華が輝きだしていた…
「…始まったな…本当にアレを目覚めさせるのかい？
今のうさぎにはまだ早すぎるんじゃ…」
「そうやって決断を先送りしたから王国は滅びたのよ……」
心配げなアルテミスにルナが突き放すように答えた
「月は無慈悲な夜の女王……か」

一方ここは無限学園地下、デスバスターズの秘密研究施設
「はぅ…うむぅあむ…」「教授の……大きい……」
「ふむ…月の王国…幻の銀水晶…セーラー戦士…なかなかに興味深いね」
白衣の怪人物はいくつもある大きな水槽に目を向けながら呟いた
「いいだろう…ユージアル君、きみの作戦を承認する。やってみたまえ」
「ありがとうございます。教授」

「あァ――！……お姉ちゃんたち…も、もうやめてよぉ……」
ウラヌスの白く大きな尻に精を放つとシンゴは息も絶え絶えに懇願した
だが前後を豊満な女体にはさまれ、どれほどもがいても柔らかい肉の
感触しか返ってこなかった
塾の帰りに近道をしようとしたのがいけなかったのだ…シンゴは後悔していた
突如暗がりに引き込まれ羽交い絞めにされるやズボンを摺り下げられた
股間に経験したことのない熱い感触があてがわれるや頭が真っ白になった
それが射精というものだとシンゴが気づいたかどうか……
ダイモーンと化したウラヌス、ネプチューンによるエナジー狩りは今宵も続いていた

「はッ！うぁあぁッ！た、助けてぇママぁ―！」
すでに三度精を放っているジンゴの若い分身は硬さを失い萎えていた
だがウラヌスが催促をするように尻をすりあげるとジンゴを抱えていた
ネプチューンの手から妖気が放たれる。ふたりに挟まれたジンゴの身体
が死にかけたカエルのように痙攣するや、再びその小さい肉棒は甦った
悲鳴をあげるジンゴの顔から生気が失われいく……
それは性行為などというものではなかった
生気を精気へと変換し吸い尽くす「捕食」だった

「…誇り高き外部太陽系戦士ともあろう者が、まるで飢えたメス豚ね」
突如三人の上から声が冷たく響く
常の天真爛漫さとはまったく違う空気を発散させながら
月野うさぎがひとつに繋がった三人を見下ろしていた


「現世での仮初めの兄弟とはいえ、そんなのでも弟なのよ
豚如きに食わせてやるわけにはいかないわ」
普段からは信じられないような
冷たい口調で言い放つうさぎ
しなやかな肢体が跳ね上がり
鋭く叫ぶ

ムーン・コズミック・パワー

メイク・アップ！

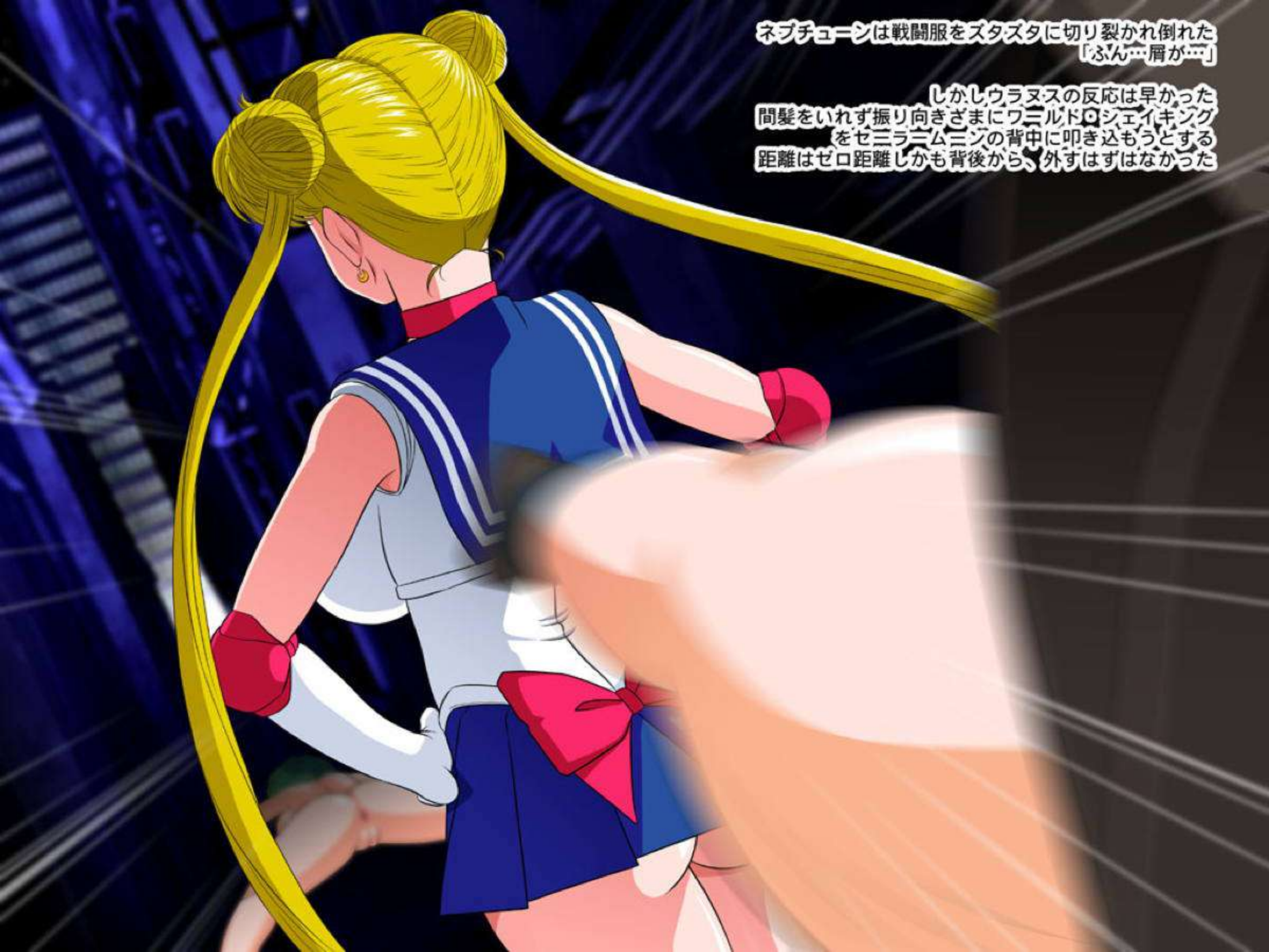
シルバーミレニアム王家の者が
陣頭に立つ姿に変わる
古よりの討魔の戦士セーラームーン
ここに顕現

普段であればここで口上となるのだが、セーラームーンが口を開きかけた
瞬間にウラヌス、ネプチューンの拳と蹴りが唸りをあげて襲いかかった
ふたりの攻撃は正確にムーンの首を捉えた…ように見えたのだが……

セーラームーンは忽然と姿を消した
それは超スピードとか目くらましの類ではなく
最初からそこにいなかったのように消えうせたのだ
ウラヌスたちは困惑して周囲を見回す

ふたりの視線が反対側を向いた瞬間だった
消えた時と同様忽然とセーラームーンはふたりの間に
姿を現した
「この私に名乗りすらさせないとは無粋な豚どもめ…」

ムーン・ハウリング！
セーラームーンが放った衝撃波がネプチューンを弾き飛ばす
今まで泣き声を増幅した超音波などという使われ方しか
なかった技であるが、これが本来の威力であった


ネプチューンは戦闘服をズタズタに切り裂かれ倒れた
「ぶん…屑が…」
しかしウラヌスの反応は早かった
間髪をいれず振り向きざまにワ三ルド✪シェイキング
をセ三ラ三ム三ンの背中に叩き込もうとする
距離はゼロ距離しかも背後から、外すはずはなかった

だが…
拳に伝わった感触は肉を打つあの独特の衝撃ではなかった
まるで泥の中にズブリと沈むような柔らかい手応え…
「！？」
ウラヌスは目を剝いた
己の拳の先にいたのは、それまでそこにいたセーラームーン
ではなく十数メートル先に倒れていたはずのネプチューンだったのだ

「あがぁッ！！！」
慌てて拳を引き抜こうとしたが遅かった…
ゼロ距離で発動したワールド・シェイキングが
串刺しにされたネプチューンの腹の中で荒れ狂う
のたうちまわる女体をただ呆然と見るしかないウラヌス

「ムーン・ティアラ・アクション…」
ウラヌスの背後から地獄から湧き上がる呪詛の如き呟きが聞こえる
ウラヌスの反応速度はたいしたものだったが右腕にネプチューンをぶらさげていたのが災いした
振り返るのがやっとで避けることなどできはしない
ウラヌスの乳房にセーラームーンの攻撃が叩き込まれ、体勢を崩されたところにさらに追撃が何発も襲い掛かる
背後からのゼロ距離攻撃……威力の低いＭＴＡとはいえこうも乱打されてはウラヌスといえども…

倒れ伏したウラヌスの頭をセーラームーンの足が無慈悲に踏みつけた
「不思議でしょ？なにが起こったかわかるかしら」
虫けらを踏み潰すように足に力をいれながらムーンが手に取ったのは
「それはね…これのおかげ」
ガーネットロッド…セーラープルートの武器であった
「これは時間流を制御できるモノなの。つまり時間を止められるってわけ。
どれほどスピードがあっても動きを止められたら勝てると思う？」
「もっともこれを借りるのに随分ゴネたけどね、アノひと」

ほんの少し時間を遡った時空の門でのこと

「な、なにをするのです！セーラームーン！」
「違うでしょ。プルート。今の私の姿をよく見た？
今の私はあなたと同じセーラー戦士じゃない…
ミレニアム王位継承第一位セレニティ、おまえの主人よ」
おそらくちびうさから借り出したのであろうルナＰボールに
拘束されたセーラープルートは、その冷たい口調にぞっとした
「プリンセス…まさかあなたは……」
「ええ…今の私の人格は『支配者』モードになっているわ…」
幻の銀水晶はその特性上、エナジーの蓄積と行使を同じ人格で
おこなうには効率が悪い…そこで王家は純粋さと支配者としての
冷静な判断とを別の人格で行わせる手法を生み出した
「まったくこの状態だと『純真』モードの浅はかさには反吐がでるわね。
だけど膨大なエナジーを発生させられるという利点がある以上仕方ないわ」

「かつてお母様は娘の初恋におもんぱかって人格切り替えに躊躇した…
その結果が招いたのは太陽系文明の破滅だったわ。私はその轍を踏むわけにはいかない…」
セレニティがプルートの背に手を当てると戦闘服の一部が解除されていく
「ぷ、プリンセス？！」
「さあプルート。誰が主人か思い出した？ガーネットロッドのコントロールを渡して頂戴」
「いけません！あなたは時を止める力を使うおつもりですね？！」
「ええ、今その力が私には必要なのよ」
「そ、そんなことをすればどうなるかわかっているのですか！」
「大丈夫よ。時空の歪みを起こした反動は銀水晶の因果律操作で打ち消せる…」
「し、しかし！」
「時の流れを無闇に乱すのは最大の禁忌…わかってるわ」

「あなたの任務への献身は賞賛に値するわ…でもそれも王国あってのこと
それも一度滅び再建の望みもいまや私ひとりにかかっている。王国もない
世界で時の秩序を守ってそれがなんになるというの？」
「……ダメです…やはり渡せません」
「そう……あくまで逆らうというのね…」
セレニティの声がさらに低くなりプルートは怖気をふるった…

「わ、私は時の守り人としての責任を果たさねばなりません！」
震える声でプルートはセレニティに抗う
「永いこと主人を見ないうちに忘れてしまったと見えるわね。
残念だわ…どうやら頭の悪い番犬の躾をする必要があるとは」

「ひぃッ！」
セレニティはガーネットロッドを振り上げると
プルートの尻を力いっぱいに打ち据えた
「あぐぅ！ひうッ！あひぃッ！」
尻肉を打つ鈍い音が響くたびにプルートの悲鳴があがる
「お、おやめください！プリンセス！」
「いいわよ…命令を聞く気になったかしら？」
「そ、それは…」

「うぎぃ――ッ！」
尻を叩くにも疲れたのかセレニティはブルートの肛門に
ガーネットロッドの石突を捻じ込んだ
セーラー戦士の強靭な肉体は、その無茶な行為で肉穴が
裂けるようなことはなかったがロッドが出入りする度に
無様に肛門が広がり粘液を噴出す
「ほらぁ早くしないと暫く糞を垂れ流しっぱなしになるわよ？」
「…い、いけま…せん…そ…それ…だけ…は…」

「がはッ……！…！！」
業を煮やしたセレニティはプルートの尻を蹴り上げた
もはやプルートは悲鳴もあげず呻くのみ
セレニティはヒールを膣穴に引っ掛けるとぐりぐりと
踏みにじるように足を押し付けるもののプルートは
決して首を縦にはふらなかった…
「さすがは外部太陽系戦士の一角ね。
この程度の拷問じゃ効かないというわけ？」
セレニティはなにか考え込むと誰かを呼んだ

「そうね…ただ罰を与え従わせるというのも無粋よね。
あなたは永いこと任務を果たしてきたことでもあるし。
まずはその労をねぎらい褒美を与えましょう。」
セレニティは背後にいた何者かに声をかけ呼び寄せた
「あ、あなたは？！」
驚くプルートの視界に現れたのはタキシード仮面であった…
がその姿はマントの下は全裸という、なんとも奇怪というか
破廉恥ないでたちで乾いた笑いをあげ続けている
「あなた確かエンディミオンを慕っていたわよね。
『彼』にたっぷりと可愛がってもらうといいわ」
意味ありげな微笑を浮かべたセレニティが命じる
「さあ、抱いてあげなさい…」

「え？あ！そ、そんな！や、やめさせてくださいプリンセス！」
タキシード仮面はプルートを背後から抱きかかえると早くもその
分身をそそり立たせ、彼女の秘裂に沿わせ始めた
「ひッ！やめて！！お願い、やめてください！！」
あれだけ痛みに耐えていたプルートは少女のような悲鳴をあげて哀願した
だがタキシード仮面は容赦なくプルートの蜜壷にずぶりと突き刺した
「アァ――ッ！」

「ふふ……どう？愛しい男と交わった気分は？」
ニヤニヤしながらセレニティが嬲るように聞いた
プルートはそれに答えずなんとか股間を責めたてる肉棒を抜こうと
イヤイヤをするように身体をくねらせるが、却って己の蜜壷をこね
まわすことになる有様であった

「はう…あぅぅ…はぁ…はぁ……」
タキシード仮面は異常なタフさでプルートを責めたてていた
すでに何度射精がおこなわれたのかすらわからない
プルートの膨れ上がったカエル腹は、膣と肛門のどちらから注がれた
精液によるものかも判然としなかった
「……も…もう……ゆ…許して…ください…」
息も絶え絶えにセレニティに許しを請うプルート
「あら？もうお腹いっぱいかしら、彼まだまだ元気よ？」
「……こ、これ以上は……し、死んじゃうぅ……」
「あなたのこれまでの貢献を考えるとこんなものじゃ全然足りないわ。
遠慮せずにもっと可愛がってもらいなさいな」
「……な、なんでも…なんでも仰るとおりに…します…から…」
「あらそう？ではロッドのコントロールを渡すのね？」
「は、はい……」

「うふふ……ありがとうセーラープルート、これで奴らに勝てるわ」
がっくりとうなだれるプルート

「そうそう、これに関しての褒美も与えないとね。もう正体現していいわよ」
セレニティの言葉とともにプルートは背後の気配が得体の知れないモノに
変わるのを感じ振り返ると…
「ヒイィッ！」
引き攣った叫びをあげたプルートの瞳に映っていたのは、タキシード仮面
ではなく異形の怪物だった
「ここにくる途中絡んできたのよ。この子。話に聞く時空の狭間に巣食う
猟犬てやつね。ちょっと叩きのめしたら結構言うこときくし便利よ」
「ひぃ！は、放して！放してください！」
「アハハハ！あなたみたいなメス犬風情にエンディミオンをあてがうと
本気で思ったの？犬は犬同士まぐわっていればいいのよ」
悪魔的な笑みを浮かべるとセレニティは踵を返す
「じゃあ、後でロッドを返しにくるから、それまで楽しんで頂戴」
プルートのかすれた叫びがいつまでも続いていたが
やがて聞こえなくなった…

「……ら…らぶりぃ…ぃ……」
傍らに倒れていたネプチューンがダイモーン特有の断末魔を
口にすると顔の星のアザが消えていった
「はんっ…どうやら貴様ら子宮に寄生体を埋め込まれてたようね」

「そういうことならとるべき道はひとつね……
スパイラル・ハートムーン・ロッド！」
「！？」
股間にピタリと当てられた棍棒と称してよいほどの得物に
なにをされるか悟ったウラヌスの顔が引き攣る

ムーン・スパイラル…
それまでの改造のせいか、ウラヌスの膣は凶器をすんなりと呑み込んだ
処刑へのカウントダウンをとるかのようにセーラームーンの声が
ウラヌスの耳に響く…

ハート・アタック！
浄化エナジーによる攻撃がウラヌスの胎内で炸裂
爆発的に膨張するウラヌスの腹部
「ら゛う゛り゛ィィ―！！！」
まさに断末魔という絶叫がウラヌスの口から迸る

ゴミでも拾うかのようにセーラームーンはウラヌスの頭を掴みあげる
その顔からはダイモーンの証たる星は消えていた
「…さて奴らの情報をとらないと…どうせ喋れないだろうから直接
脳から拾うしかないわね…」

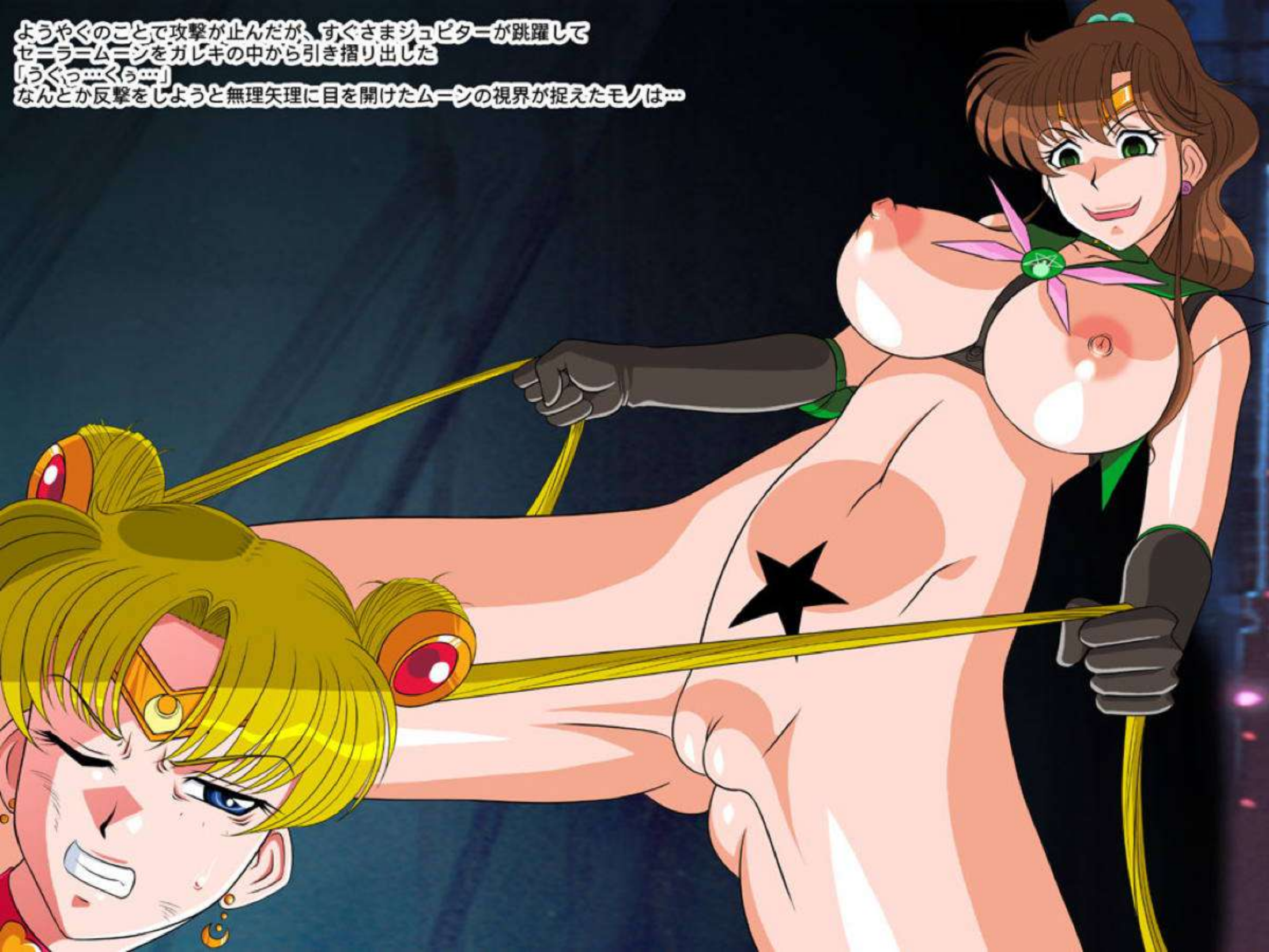
ウラヌスの脳にダイレクトリンクを構築しようとした瞬間
一瞬無防備になったセーラームーンに一閃のビームが奔った
「!?」
セーラームーンの手からガーネットロッドを弾き飛ばしたのは…

ビームの飛んできた先を睨みつけたセーラームーンの
視線の先に立っていたのは行方不明となっていた仲間
たちであった…
だが全員の下腹部にはダイモーンの証…星のアザが

一瞬驚いたセーラームーンではあったが、すぐさまガーネットロッドを拾い上げようとしたものの
すでにマーズとマーキュリーは攻撃態勢に入っていた

「ば、バーニング・ケツマンダラーッ！」「シャ淫アクア・イ尿ージョおほぉン！」
なんとも間の抜けた技名を叫びながらマーズの肛門とマーキュリーの尿道口が
くぱっと広がるやそれぞれ火炎と水流を撃ち出した
どういう理屈か技を発動させることによってふたりは快感を感じているらしく
ビクビクと痙攣して顔を紅潮させ白目を剝いている

名はバカらしかったが威力はこれまでにないものだった
セーラームーンに襲いかかった炎と水は一撃で戦闘服を打ち破り叩きのめす
吹き飛ばされたセーラームーンに容赦なく追撃が撃ち込まれ、彼女が動かなくなるまで攻撃は続いたのであった…


ようやくのことで攻撃が止んだが、すぐさまジュピターが跳躍して
セーラームーンをガレキの中から引き摺り出した
「うぐっ…くぅ…」
なんとか反撃をしようと無理矢理に目を開けたムーンの視界が捉えたモノは…

ボコォッ！
突如、音をたててジュピターの腹が膨張した
「なッ！？」

「くぱぁくりんぐ・ちんこぷれっひゃぁ!!」
マニズ、マニキュリーと同様ろれつのまわらぬ口調で叫ぶジュピター
それと同時に股間からずるりと這い出してきたのは白く長い肉塊であった
おそらくはダイモーンの変種であろうそれは眼前にあったセーラームーンの股間へと
伸びていく…

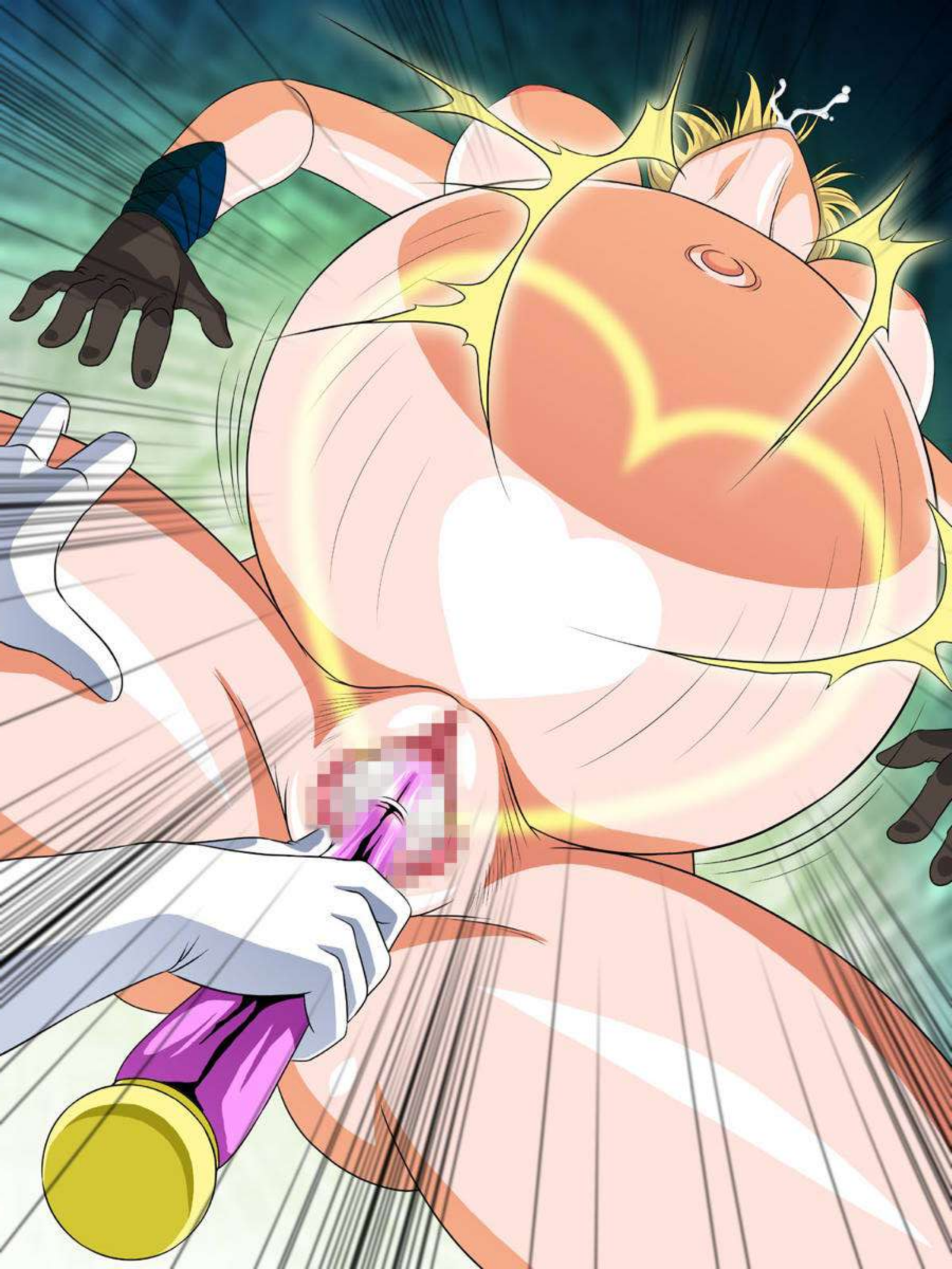
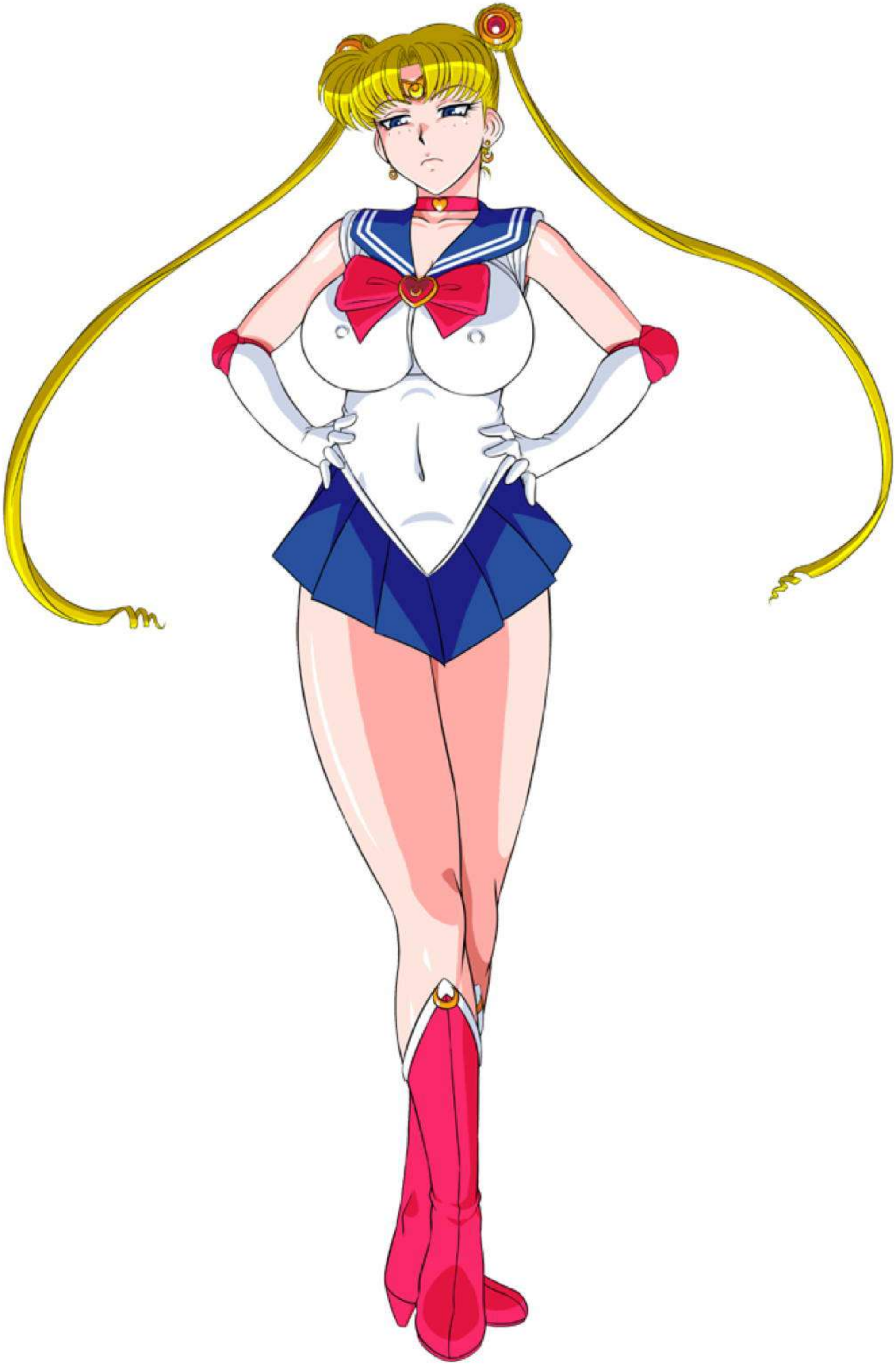
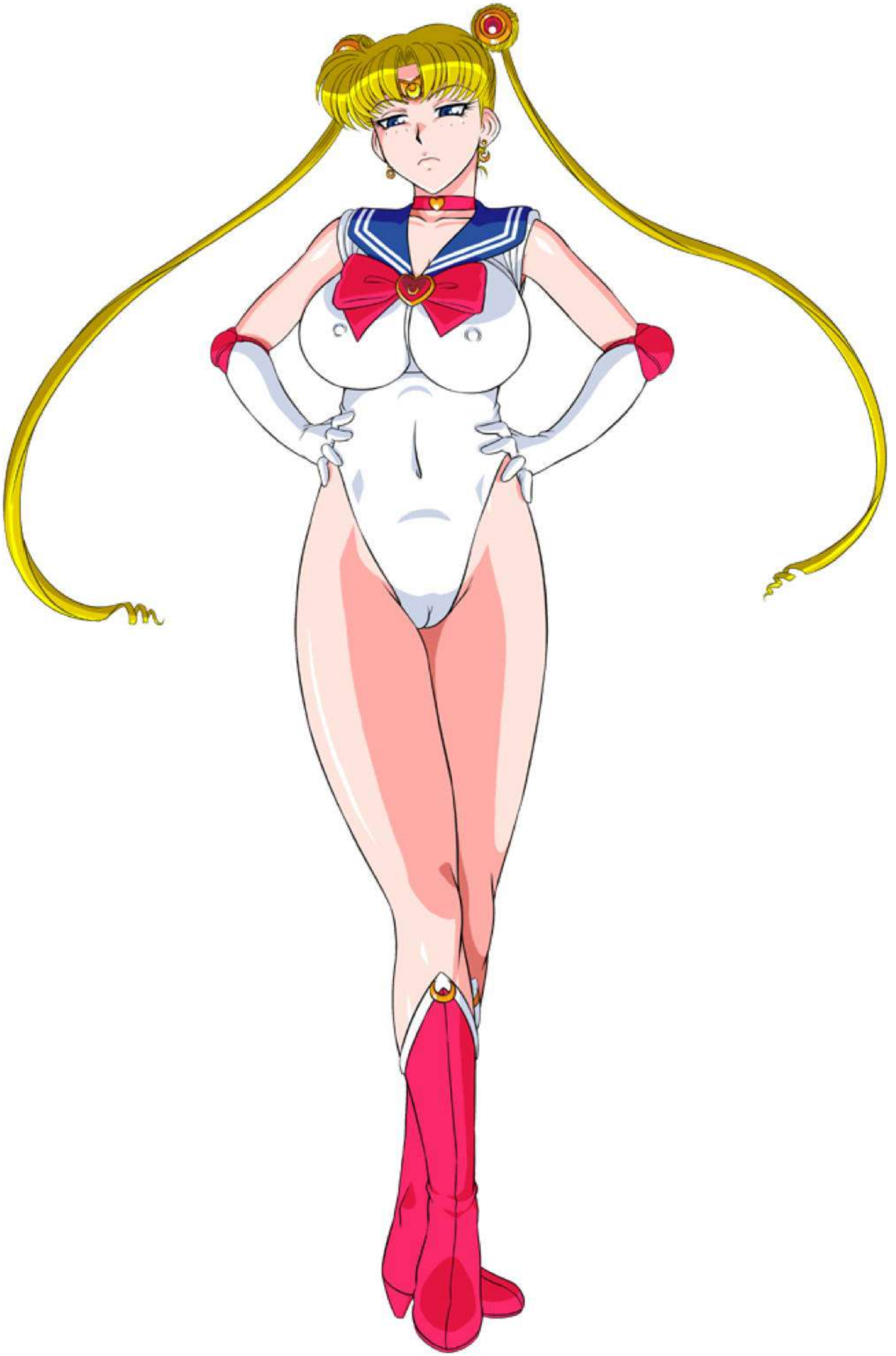
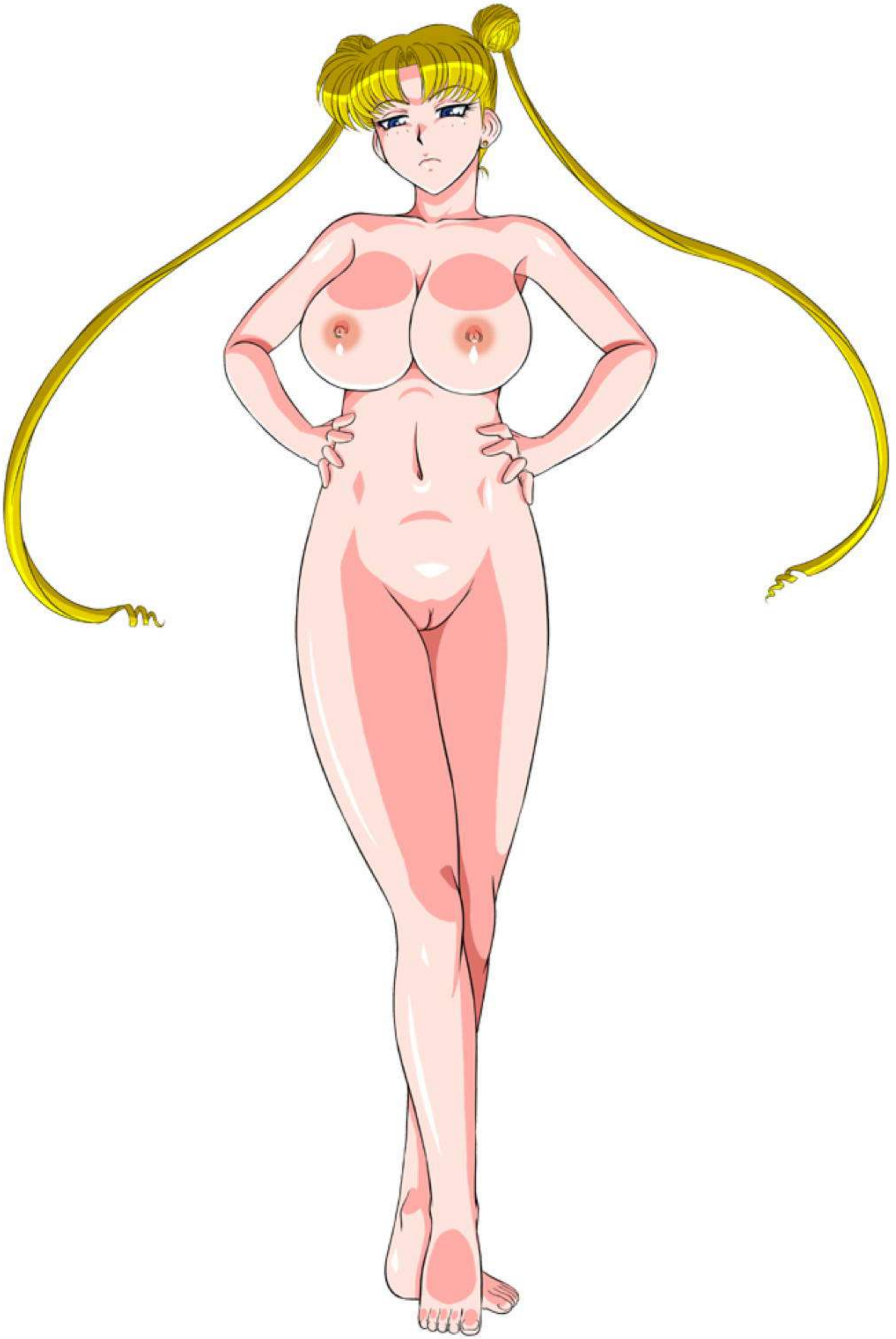
「うッぎひぃィィ―ッ！」
白く伸びた肉塊がセーラームーンの肛門を押し広げ、その体内へと潜り込んだ
ただそれだけならここまで彼女が苦しむことはなかっただろう
だがその肉塊は強力に帯電していたのだ
少しずつムーンの内臓を這い回るたびに電撃が彼女の身体を焼き貫き
その肉体は激痛にのたうちまわった
「あぎぃ！や、やめてぇ！」
だがその叫びはジュピターの耳には届かない…

「ジュピターだけずるいわ…アタシにも楽しませてよ」
ヴィーナスがセーラームーンを引き起こし呟く
「ヴィーナス・ふぁっくみー・チェーン…」
ジュピター同様股間から肉塊を吐き出すとそれはムーンの
膣を貫いた。やはりジュピターと同じく強力なエナジーを帯びた
肉塊はムーンの膣を灼き子宮へと突き進む…
もはやムーンの叫びは声にならずただ口をぱくぱくとさせるだけだ
「ふふ…とっても美味しいわ、セーラームーン」
「本当…このまま食べちゃいたいくらい…」
虚ろな目つきで狂った行為に耽るジュピターとヴィーナス

「ま、まずいわ。このままではっ！」
体内を灼かれる激痛は徐々に上へと登っていき
今にも気が遠くなりそうだ
しかし未だセーラームーンは反撃の機会を探っていた
だがふたりの力は以前より格段に強く抜け出せそうにない
その時だった

（うさぎ…）（うさぎちゃん…）（うさぎちゃん！）
どこか遠くからセーラームーンを呼ぶ声が聞こえる
（…みんな…！）
気づくと周囲に四人がいた。その目に狂気や虚ろはない
（うさぎ、負けるんじゃないわよ！）（うさぎちゃん頑張って！）
次々にセーラームーンを励ます声が聞こえる
（…ああ…そうよ。私はこんなとこで負けるわけにはいかない）
気を取り直し力を振り絞ろうとした時
（…でもね…苦しかったら諦めてもいいのよ？）
（……え？）

ぶばぁッ！
勢いよくセーラームーンの口から肉塊が飛び出す
先ほどの光景は闇に意識が落ち込む寸前に見えた
幻覚だったのか、それはもう誰にもわからない…

「どうかね『プリンセス』の具合は？」
「はい教授。予想以上に素晴らしい性能です。エナジー蓄積量のキャパシティは
ここでの機器でも計測不能なほどで」
「そうかね。『ファラオ』の召還に使えるだろうか」
「いえ、そちらは残念ながら…これはエナジーの量より制御の問題です」
「ふむ、するとやはり『ミストレス』の覚醒が先か…」
「ええ…いささか強引な手段にはなりますが、この実験体を使わない手はないかと…」
会話の主たちの視線の先には、まるで樹木のように束ねられたエナジー伝導チューブ
に果実のごとくぶら下げられたセーラームーンの姿があった
チューブからエナジーがムーンの胎内に送り込まれるごと、
その腹が妊娠したかのように膨れ上がり震えていた…

「ああ…どうやらパーティには間に合ったようだな」
無限学園のある無限洲を見下ろすビルからちびムーン…
というには成長しすぎている人物が口を開いた
「闇堕ち経験のあるセーラー戦士なんて奴がいるとは思わなかったが
いい拾い物だったぜコイツは」
その口調は女性…いや人間が喋ってるには不自然なところのあるものだった
「さて、うっかり闇の支配者なんぞ呼び出されると俺も好き勝手できんからな
面倒だがひと肌脱ぐとするか…」
光の戦士が全員倒れた今、闇と闇の決戦が始まろうとしていた…
END